

#Prepare タックルの方程式

スタート=レンタルタックルがオススメ
マイ・タックル選びのポイントは「軽さ」

●100~150グラムのジグに、PE3号でリーダーはフロロカーボンの50ポンド(14号前後)。スピニングリールは8000番が主流だが、これらを一気にそろえるとかかなりのお値段に。最近のルアー青物船はしっかりしたレンタルタックルを用意しているの、まずは気軽にレンタルで挑戦を(ジグは自分で用意する)。ハマってマイ・タックルを用意する際は、重いジグをシャクリ続けるハードな釣りだから軽さにこだわるといい。やり込むうちに、ジグの重さと竿の調子のバランスでジグの動きが変わることに気付くはず。そうになったら……部屋はジギングロッドだらけ(笑)。



▲ジグの動きに大きく影響する竿の調子。エキスパートほど持ち込みタックルが増える

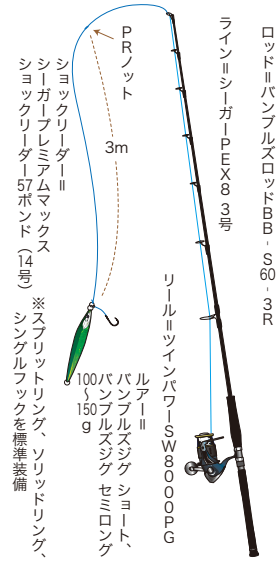


▲タカハシゴーが使ったのはバンブルズBB-S510-SF。先調子でアクションしやすい



▲初めてのジギングロッドにオススメしたいのがジャッカルのパンブルズBB-S60-3R。やや胴調子にセッティングされており、ショートピッチからロングピッチまで幅広いジャークに対応するレスポンスのよさが特徴だ。持ち重りしない軽さにもこだわっている。コスパも良好!

ヨッシーのジギングタックル



#Prepare ルアーの方程式

目標は「シルエット×重さ=ベイトフィッシュ」

●青物はフィッシュイーター(魚食魚)だから、選ぶジグはベイトフィッシュ(被食魚)を模するのが基本。ベイトフィッシュが何かは地域によってかなり違いがあるので、まずは船長に問い合わせよう。今回釣行した外房の青物は、イワシを中心にサンマやトビウオなどを食べているのでシルエットの似たセミロングの100~150グラムがメイン。このタイプは潮切れがよく、潮が速いときにも扱いやすいのが特徴。ただし、潮が効いていないときは波動の強いショートジグを使う。そのため、初めてでもセミロングとショートそれぞれの100グラムと150グラム、計4本は用意したい。



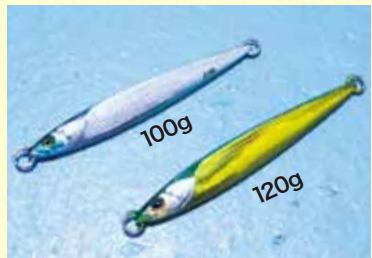
★「フック選びのポイントは、フックがジグを抱かないこと。抱いてしまうとジグの動きが悪くなる。バンブルズはジグに合ったサイズのフックを標準装備!」(ヨッシー)



▲使うタックルによりジグの動きはかなり変わる。釣行を重ねると「このタックル、この潮なら、このジグがピッタリ」という法則が見えてくる。海況はそのときどき。つまりジグは増える



▲形状はベイトフィッシュの大きさに合わせたい。釣れている人のジグサイズが大いに参考になる



▲地域によってかなり異なるが、外房は100~150グラムが基本。潮が速いときは200グラムも



▲曇天や雨、潮が濁っているときはアピール系、晴天時や潮が澄んでいるときはナチュラル系

「出鼻をよくしてくようだけど、そう簡単には釣れる魚じゃないんだ、青物は」とヨッシーはいつになく真剣だ。外房大原港の松鶴丸は青物ルアーの専門船。6月26日、南風が強く吹く予報のこの日、ヨッシーは青物ジギングという名の戦いに挑もうとしていた。

糸の先にジグが付いているだけ、というシンプルを極めた仕掛けで青物と1対1のバトルを繰り広げるジギングは、実にスポーティーな釣り物である。そして、青物は気まぐれだ。神出鬼没の回避魚。大らかな傾向はあっても、それが必ず適用されるとは限らない。昨日ドカンと釣れ盛ったからと言って、今日釣れる保証はどこにもないのだ。「出鼻をよくしてくようだけど、そう簡単には釣れる魚じゃないんだ、青物は」とヨッシーはいつになく真剣だ。外房大原港の松鶴丸は青物ルアーの専門船。6月26日、南風が強く吹く予報のこの日、ヨッシーは青物ジギングという名の戦いに挑もうとしていた。



魚とジグが海中を巡り合う瞬間は、食いつける可能性は結構高い。その場面をどうやって作り出すか……

吉岡進の
新世代
沖釣り方程式
第2回

Profile

先生◆よしおか すずむ
「ヨッシー」の愛称で人気のジャッカル・ソルトプロスタッフ。沖釣りをメインに日本狭しと走り回り、ルアー、テナヤと幅広い釣りを楽しんでいる。新型コロナウイルスの影響で自粛モードだったため、久しぶりの釣りにまだ体が慣れていない様子。クレハインストラクター。
生徒◆たかはし こう
幼稚園のころから沖釣りをしているはずなのに、いつまでたっても上達しない「永遠の初心者」。釣りそのものより海に浮かんでいることに喜びを感じている様子で、うまくなる気配なし……。



#Target & Game guide 青物ってどうやって釣るの?



●金属製のジグを海底まで落とし、海面に向けてシャクリながら巻く、を繰り返すシンプルな釣り。青物の反応が出ている水深を船長が指示してくれることもあるが、基本的には海底から海面までシャクリ続ける。海面直下でヒラマサが、ジグの回収でワラサが食ってくることも少なくないから、最後まで気を抜くことはできない!



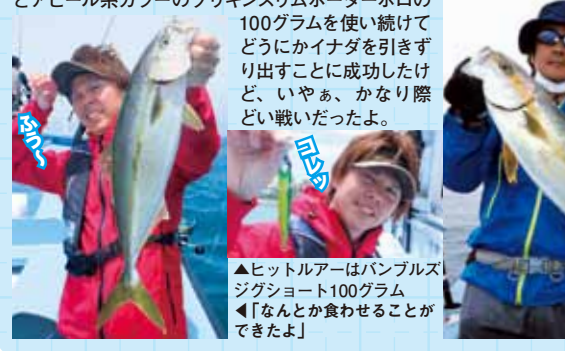
★外房青物ジギングのメインターゲットはヒラマサ。20メートル以浅の根回りがポイントだが、20キロものモンスターも姿を見せる海域だけに緊張感がある。ワラサは群れで回遊しているケースが多く、1尾釣れると捕食スイッチが入り大爆釣になることも。

外房の
青物ジギング

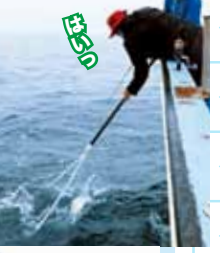
●魚と人が繰り広げる、チカラとチカラの勝負だ……!
外房の青物ジギングには、スポーティーな魅力がある。細かなテクニックはもちろんあるが、とにかくジグを海中に投じておくこと。それが青物との戦いに勝つための最高の近道。たくましい心と体を兼ね備えたヨッシーが外房大原で青物とのバトルに挑んだ!

文●高橋 剛 撮影●本誌編集部

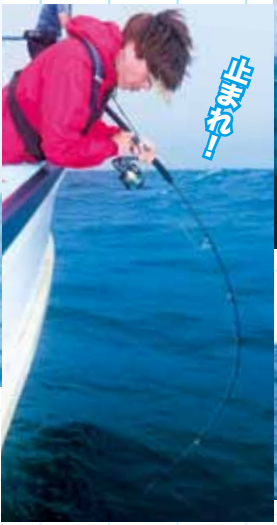
#Report ヨッシーの実釣レポート
濁りに合わせたジグチョイス
 ●ひと流し目が始まってわずか15分ほどで右トモの石井さんがヒラマサを釣ったので、「今日はイケるか!?!」と密かに期待してただけで、続かなかったね……。途中、青物の雰囲気は遠のいたときにはボトム中心のジギングで根魚を狙ってみたけど、それも不発。全体的に活性は低かった。気になっていたのは潮が白濁りしていたこと。「この濁りではジグに気付いてもらえないのかも」とアピール系カラーのグリキンスリムボーダーホ口の



▲ヒットルアーはバンブルズジグショート100グラム
 ▲「なんとか食わせることができたよ」



▲アピール系のジグに反応した
 ▶船下に突っ込みラインがドンドン引き出される
 ▲食べてうまいのも青物の魅力。釣れすぎたときや小型ならリリースもまたよし。ここは考え次第だ

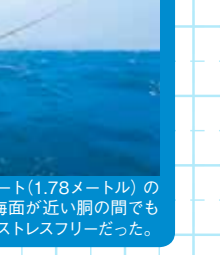
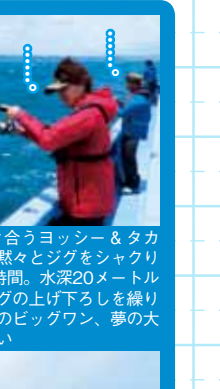


▲釣り場は大原沖の水深20メートル前後
 ▲トリヤマを発見、チャンス到来!

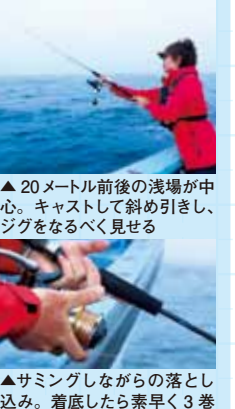
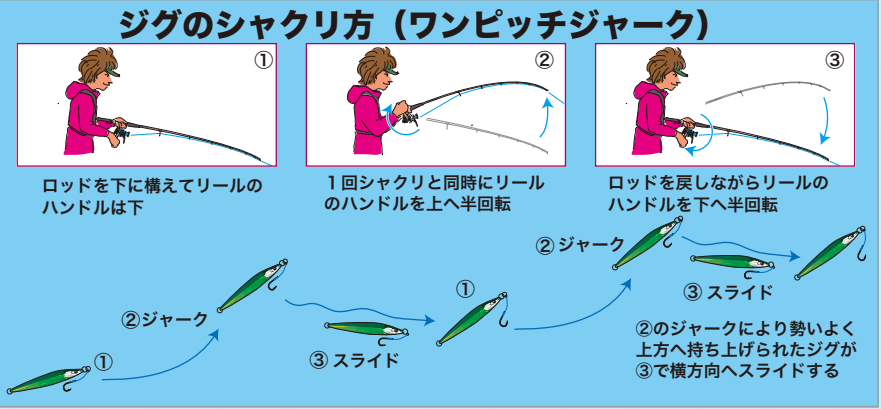
#Solution 外房の青物ジギングの解
ジグ海中滞在時間の長さ
=青物ゲットのチャンス
 ●気まぐれな回遊魚を相手にしたとき、何がもっとも大事か。それはジグが海中にあることだ。当たり前のように聞こえるかもしれないが、これは青物ジギングの真理。魚が回ってこない間は心が折れそうになるけど、諦めることなくジャークし続けること。勝利はそこにしかない。魚とジグが海中で巡り会うことさえできれば、食ってくる可能性は結構高い。夏〜秋、外房は浅場が中心。キャストしての斜め引きでジグの存在をなるべくじっくりと魚にアピールしよう!



▲タカハシゴは5.1フィート(1.78メートル)のショートロッドを使用。海面が近い間でもアンダーキャストしやすくストレスフリーだった。



▲タカハシゴは5.1フィート(1.78メートル)のショートロッドを使用。海面が近い間でもアンダーキャストしやすくストレスフリーだった。



▲20メートル前後の浅場が中心。キャストして斜め引きし、ジグをなるべく見せる
 ▲サミングしながらの落とし込み。着底したら素早く3巻きほどして根掛かりを防ぐ

#船宿インフォメーション
外房大原港 松鶴丸
 ☎070-6523-1569
 (詳細は巻末の情報欄参照)
 ●料金=ルアー青物乗合一人午前1万1000円、午後1万円、一日通し2万円
 ●備考=午前5時半、午後12時出船。レンタルタックル2000円

▲船着き場のコンテナにある席札のキャップを取り席を確保、受付を済ませてから乗船



●外房大原の青物ルアー専門船ということで、一度乗ってみたかった! 中村真也船長は穏やかな人柄で、とても優しい。初めての青物ジギングに緊張しがちなビギナーでも、この船なら安心して楽しめるんじゃないかな。ポイントも頻りに流し変えてくれるので、「どうにか釣ってほしい」という物静かな船長の秘めたる熱い思いが伝わってきて、竿を出しているこちらのテンションも途切れずに済む。レンタルタックルも充実。初チャレンジにオススメの船だ。

#Howto 先生が教える基本釣法
色々なジャークを身に付けよう!
 ●鉛(やタングステン)のカタマリを落として巻くだけ、というシンプルな釣りだけど、それだけに奥が深いのがジギング。竿をシャクリ上げ、竿先を下げながらリールを1回転させるワンピッチジャークを基本に、リール半回転のハーフピッチジャーク、ゆっくりしたアクションのスローピッチジャーク、ただハイスピードでリールするジャカジャカ巻き、さらに激しいロッドアクションをつける丹後ジャークなど、バリエーションは豊富だ。回遊魚である青物がターゲットなので、正直、活性が高い魚がいる場所にうまく当たれば何をやっても食ってくる。かと思えば、魚探に反応があってもジグを完全無視なんてこともしばしばの気まぐれさなので、色んなアクションを練り出せるようになっておくといいね。ジャークは部屋でも練習できる。ドラッグをユルユルにしてラインを椅子など重いものに結びつけばOK。竿を振れる天井の高さは必要だけども!

#Notice 生徒なりのお気付きポイント
青物ジギングは健康にイイ!
 ●モンスター級のヒラマサが飛び出してくる可能性もある外房の青物ジギング。釣っている間じゅう緊張感があって、気疲れしてしまうほどだ(笑)。基本的には竿をシャクってリールを巻くだけの簡単な釣法だから、永遠の初心者のおれでもとつきやすい。リズムを取れるようになるには慣れが必要だけど、1時間ほどでどうにかカタチになる。当日はショートタイプの100グラムと120グラムのジグを使ったが、同じ形状、同じタックルでもジグの重さが20グラム変わるとだいぶ印象も異なる。100グラムは動きが強く感じられ、120グラムは弱めだった。ヨッシーいわく、軽いジグほど波動が強めの傾向があるそうだが、「その日どっちがイイかは、釣れてみなきゃ分からないんだよね」とのことだった。それにしても青物ジギングは体にキク! いい汗流して魚を釣って健康増進、運動不足のオジサンにこそピッタリだ。

タックルのシンプルさと同様に、青物ジギングは釣り方もシンプルだ。ジグを落とし、着底したらシヤクリ上げ(ジギングではジャークという)、竿先を下ろす動作に合わせ同時にリールを巻く。基本はこれだけ。外房でのメインターゲットはヒラマサで、ワラサやイナダも交じる。ジグは、ジャークしたときには逃げ惑う小魚のように、リールグのときにはフォールして弱った小魚のように海中でせまらめく。よく見るとジグは左右非対称の複雑な形状で、水の抵抗を受け生命感あふれる動きをするのだ。そして、結論を言おう。この日の外房の海は、非常に厳しかった。水温は約20度とまずまずながら、潮が動かない。さらにヨッシーは白濁りを気にしていた。右トモで石井さんが2キロ級のヒラマサを上げたのは、ヨッシーが釣ったイナダ2本のみ。そのイナダは元気がいいのナイイスフアイトで楽しませてくれたが、ヒラマサがヨッシーの竿を曲げることはなかった。だが、ヨッシーも筆者タカハシゴも、約5時間にわたってジグをシャクリ続けた。中村真也船長もこまめに船を流し変え続けた。プラグを投げ続けたお客さんみいた。みんなが全力で臨んだのだから、釣果はもう、仕方がない。敗戦もまた爽やか。再び戦いを挑むのみ。青物ジギングはまさにスポーツなのである。